

## 昔軍都の夕日

渡会 克男

『現代詩手帖』をめくっていたオフクロが呟いた。

「何じゃあ、これは。宇宙人の言葉かいな。簡単な事を七面倒に書きおつて」  
そう言つて、納戸の茶箱から探し出してきた一枚の葉書き。

「『愛』なんて、これで十分じゃ」

文言はたった一言『アナタ』。

「検閲があつたから余計なことは書けんじゃつたケエ。——これは弾痕ヤ」  
それは戦地のオヤジにオフクロが送つた年賀状で、『ナ』の字の横に小さな穴があいていた。

軍都市川。

かつてこの辺りには軍隊を歓迎した人々がたくさんいた。大量の物資の輸送に  
売買、水道やら鉄道やらの恩恵のために。

軍隊手帳によればその軍都市川に置かれた野戦重砲兵第一連隊所属の一兵卒  
だつたオヤジ。

馬糞臭い満州の荒野を背景に銃剣を捧げる若者は、新妻の体温がいつぱいつま  
つた『アナタ』に身もだえしたのではなかつたか。

「脱帽だなあ」と照れる息子に、

「見てみイ、薔薇一輪にも詩があるんじゃ。藤村、白秋、光太郎……わしらはそ  
れでいい。こんなものは——」

そう言つて、無学だが詩を愛した手が『現代詩手帖』をポイと庭に放り投げた。